

金属塗装

小庄司文孝さん

キヤノン株式会社

生産技術本部生産設計技術センター

塗装技術担当専任主任

こしょうじ・ふみたか●1963(昭和38)年新潟県生まれ。工業高校機械科卒業後、1982(昭和57)年キヤノン(株)入社。当初は管理部門配属、5年後に製造部門に移り試作の塗装業務に従事、現在までカメラをはじめとする精密機器の新製品の具現化に貢献。平成23年東京都優秀技能者(東京マイスター)知事賞の認定を受ける。1級塗装技能士。



「師匠」から受け継いだ技を次の世代に

わざ

キヤノンから新たに出されるさまざまなデジタルカメラ。新製品の開発にあたっては、試作の工程が重要です。主に手吹き塗装による試作に携わってきた小庄司さんは、カメラや付属品をはじめ数多くの種類の製品を手がけてきました。昔から機械いじりや絵を描くことが好きで、モノづくりへの志向性もあったようです。

当時は、「何か手に職があったほうがいいのかな」と思い、工業高校機械科に進学、卒業後上京してキヤノンに入社しました。正直言つと都会へ出たいという気持ちがあったことも確かですね。子どもの頃は、家にあった耕運機などをいじったり修理を手伝ったりして、機械には親しんでいたと思います。

入社から5年ほど管理部門にいた後、製造に移って、この仕事をするようになりました。試作部品の塗装がメインです。ですが、カメラやその付属品、ストロボ、レンズなどさまざまな製品がありま

すから、それに応じて塗装の種類も多様になります。

金属塗装は、滑りをよくしたり、ツヤをなくしたり、遮光性をもたせたり、といった機能性のための塗装です。錆を発生させないためにめっきし、下処理をし

たものを塗装します。樹脂塗装の場合は、手触り、風合い、美観などを出すために塗装します。

同じ仕事をする社員が多くいるわけではな

いたため、小庄司さんは体系化されたカリキュラムによる研修を受けたわけではありませんでした。師匠である前任者から職場でマンツーマンの指導を受けます。

この仕事に研修カリキュラムのよう

なものはありません。後を継ぐ形で、前任者の下についてやりました。いわば前任者が私の師匠で、徒弟制のように「伝承」したわけです。

管理部門にいたときに現場を見たことはあつて、流れはわかっていましたが、実際に塗装をやるのは初めてで、一から学んでいきました。金属だけでなく樹脂の塗装もするなどの当社特有の必要性

もあつて、職業訓練校等の外部の研修機関を利用するより、徒弟的に学ぶことになったのかもしれない。

るものなので、若い人にもどんどん受けてほしいと思います。

塗装の仕事の現場では、微妙な色へのアプローチや最も適切な作業方法など、判断の難しい場面も多く、苦労も絶えませんが、その反面、開発を終え、完成された製品が売り場に陳列されるのを見ることができた時に、喜び、やりがいを感じると言います。

仕事は、塗装の前段階、下地を作る

ところから手がけられます。金属塗装では、下地を作ることが重要なポイントです。塗装をきれいにするには下地をきれいにしなくてはならない。傷をどう消すか、どう磨くか、それらが塗った時にどう反映されるかを判断する必要があります。

そして、手作業で下地を作る、色を作る、そして塗る、といった総合的作業になるので、手先の器用さや空間判断力、デザインのセンスなどが求められます。模写する、自分の中で情報を整理する、物を立体的にとらえてそれを絵で描く、といった種類の能力が必要でしょうね。「この面を塗ったときにこつちの面にどういった影響があるのか」ということも考えながら方法、手順を考えて塗るわけです。

最近のデジタルカメラなどでよく行われるのは、マグネシウム焼付け塗装です。マグネシウムは強くても軽いとい



試作の塗装を手がけたデジタル一眼レフカメラを手に
キヤノン本社にて



キヤノン(株)下丸子本社

う特性がありますが、もともとあまり塗料がのらず、錆びて腐食しやすいので、それを防ぐための下処理をします。パテを塗って下地を作ったりして、マグネシウム焼付けの方法で塗装したものが製品として使えるようになるにはどうしたらいいか、ということに何年も取り組んできました。

試作では扱うものが一個一個違うので、自動的に機械でやるわけにはいかず、手吹き塗装をします。スプレーガンを使う手吹きは、社内でも以前は多く行われていましたが、自動化・機械化され、今は私の現場くらいでしか行われていません。

塗装というのは数字に表しにくいんです。色を作る段階で見本の色をどうやって再現するかが非常に苦労するところです。経験の積み重ねでできることとそうでない部分がある。人が見たのと自分が見たのとが違う場合もあり、判断基準が難しい。正解に近づけるための基準を自分で身につけるしかない。最終確認をとるまで納得いくまで作ります。

この仕事では、例えば「この色を入れたらどう変わるか」という経験の積み重ねとセンスが大切です。最初からセンスのある人もいますが、私自身も合わせていたかどうかはわかりま

せんね。師匠の教えがあつたので、積み上げられたものはありましたけれども。師匠と同じ色を作ることまではできるんですが、そこから先がなかなか進みませんでした。

修業時代を振り返ってみると、技が少しずつ自分のものになっていくという楽しさもありましたが、やはり辛い面もありましたね。一度大失敗して、メインの仕事をはずされて「傍から見ろ」と言われ、もう辞めたいと思っただけもありました。

でも、自分が関わってきたものが製品として出て店頭に並べば、仕事の成果として「よかった」と思いますね。それがやりがいにつながっています。

技術の発展によって現場で求められる技能も変化していく、後続の人たちの世代もまた変わってきますが、「技能を継承していく」という課題は変わりありません。

「モノづくり」とは、人の考えや技術、技能によって、いかに「いいもの」、「自信をもつて出せるもの」を作るかということだと思えます。単なる「製造」と違って、長い経験やこだわりがあつてこそなされること、と言いますか。「技能」は、簡単には身につかない、努力と積み重ねによって身につくものではないか。『モノづくり』を裏付けるものだと思えます。

塗装は時代によって変わってきているので、私も対応できるように今後も努力したいです。

そして、身についたものを次の人に伝えること。今の部署は3人でやっていて、私が指導的役割をしています。ただ、私が学んできたように徒弟的な形ではできないでしょうね。私の師匠の場合は、「こうしろ、ああしろ」とは言わず、「やるから見ろ」と。まずはやってみて見せる。学ぶことは、傍で見ながら盗むことでした。

今は試作の日程も短くなっているのでも、効率的にするためにも、ある程度の標準・基準を作って用意して教えてから私がやってみせる。厳しくするか褒めて伸ばすかといったことも含め、教え方は難しいですね。

今の若い人たちには、何か興味があればやってみたほうがいい、と言いたいです。うまい下手は別にして、得られるものがきつとある。「何かを作った」という経験は、何かを作ったという経験は、その原因を探ることは、例えば製造業の現場で機械加工をした結果、製品がこうなるという判断に通じるものがあるんじゃないかと思つてます。

今は塗装に従事する人が限られていて、もう少し興味をもってほしいという気持ちがありますね。